地質ニュース　434号，44-46頁，1990年10月
Chishitsu News no. 434, p. 44-46, October, 1990

ライマン雑記(3)

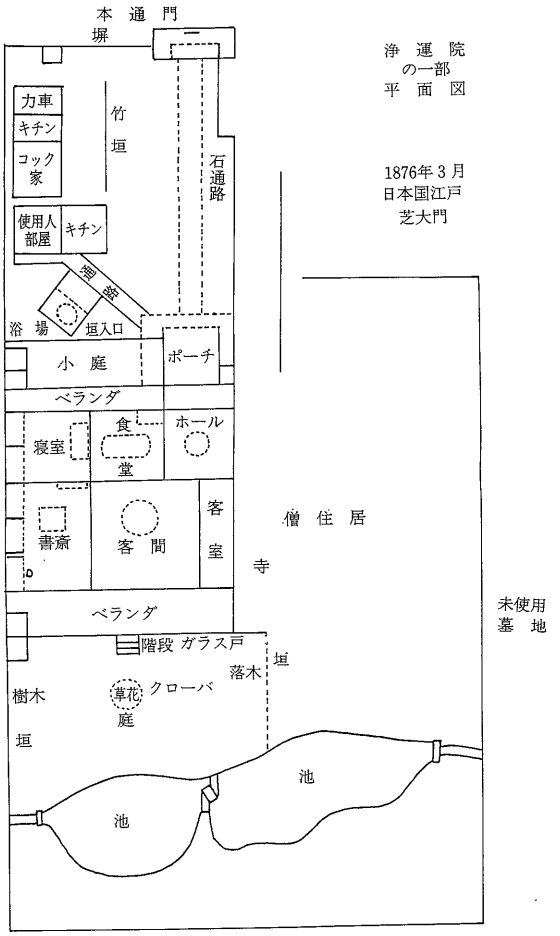
副　見　恭　子[1)]

浄　運　院

ベンジャミン・スミス・ライマンをして「私の人生での重大な変化」と云わしめた浄運院（第1図）への引越しは，何時行なわれたのであろうか？　彼が開拓使の建物から約4分の1マイル（4百メートル余り）にある日本家屋を自分の新しい栖にしたと，2才下の妹メリーに報告した手紙の日付けは，1874年（明治7年）12月5日で，頭書の新住所は，浄運院 No.55 大門内　芝江戸である（第2図）．新居に移るまでは，開拓使　江戸芝 Tokei の一語や，開拓使芝江戸等の単語の組合せ等もあり，それに日本を加えて，アメリカから送れば増上寺内開拓使お雇い外国人宿舎に住むライマンの許に無事手紙は届いたようである．

ライマン来日の翌年明治7年の春ごろから開拓使仮学校が札幌に移る計画がなされ，明治8年9月には，仮学校が北海道に移り，正式に札幌学校として開校したから，早い時期に当然ライマンは自分の行く先を考えたに違いない．すでに黒田清隆及び開拓使との溝は深まり，契約は明治8年12月6日で満期であり，第3回北海道地質調査が終って江戸に帰ってくれば，仮学校外人宿舎はもうなくなっているのを考慮に入れ，持ち前の行動力を駆使し選んだのが浄運院ではなかったろうか？　定期的にパンを購入する精養軒，新橋駅や浜離宮に近く，隅田川も利用でき至って便利な位置である上，なにしろ開拓使に近く，馴じみの芝で工部省にも遠くない見事な選択である（第3図）．

さて前の問題，引っ越しの月日に戻ろう．明治7年，第2回北海道測量調査は10月22日に終え，箱館から青森に渡り，陸路で帰京しているので約1ヶ月間ゆっくり休息し，あまり寒くならぬ11月末とみて書簡コピー綴りのページをめくっていたら，ミスター・クルクシャンクへの11月21日の手紙に巡り会った．ライマンが彼に「もうあと一週間すると新居の自慢ができるが…」と書いてある手紙を本にして11月28日か29日と引越日を決めてもさして間違いないと思う．

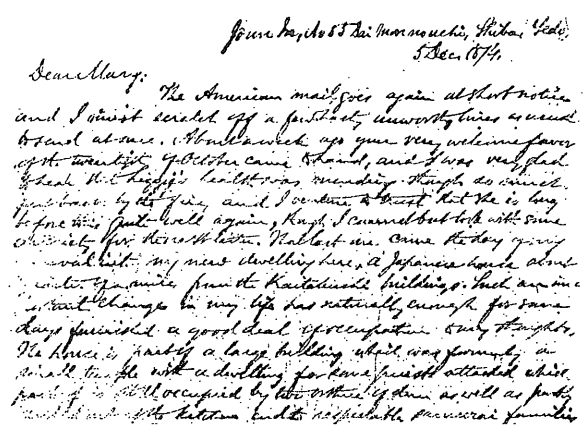


第1図　浄運院の見取り図

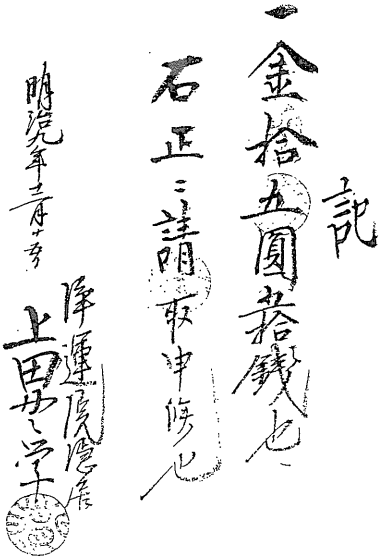
ライマンは，転居に満足し，数日は引越に没頭した．当時は，アメリカ行郵便は何時出るか事前に知らせがある．今回も，メリーへの手紙を，知らせと便を出す短い合間にライマンは走り書きしなければならなかったが，12月5日付の手紙は，リズイ，姉のエリザベスの病気回

1)　マサチュセッツ大学顧問：8 Eaton Court, Amherst, MA 01002, U.S.A.

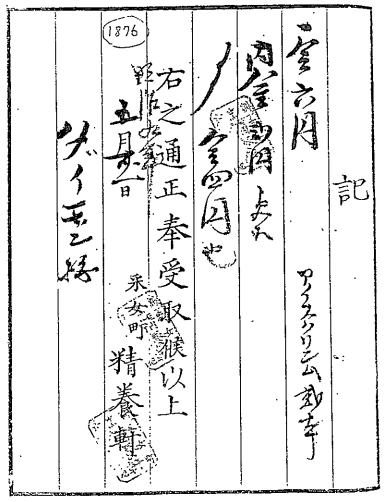
キーワード：ライマン，浄運院



第2図　妹メリー宛の書簡の一部



第3図　浄運院の家賃の受取証



第4図　精養軒からのアイスクリームの受取証

復の喜びの文以外はすべて浄運院の新居について，文字通りぎっしり3ページを埋めつくしているので，解読後軽い疲れを感じた．

家は以前僧の住居が付属していた小さなお寺の大きな建物の一部です(増上寺坊中子院の意—筆者注)．現在も寺に二，三の僧や相当の地位にある武士の一家が住んでいます．お寺の名前は浄運院，英語でPure Circuit又はVicinity Templeが日本語の意味に最も近い訳です．芝の大きな構内の大門の内に，又往来の激しい大通りにあります．通りは長くありませんが東海道につながり，江戸への本通りに通じています．約3百ヤード（3百メートル位）のところに芝増上寺の大本堂がありましたが，去年の元旦焼失しました明治6年12月31日12時過ぎ，増上寺大殿他が焼けた（増上寺史，村上博了，東京大本山増上寺，昭和49年による—筆者）．

ここで「あらっ」と思ったのは浄運院の英訳である．運はFateでなく巡るの意味の点で，どうもライマンの訳が正しい気がする．去年，森本貞子さんと浄運院を訪れ，大へんお世話になった住職鈴木専精，妻鈴木澄栄，小倉（旧鈴木）なほ子（鈴木専精の姉）各氏に，運の意をおたずねすればよかったと今になって残念に思う．小倉さんは大正末期の浄運院を語って下さった．夜になると，大門のあたりは真暗でフクロウがないた話，冬は火鉢でとても寒かった話，夏は夜店が並び，秋の落葉，古い灯篭，筧，池のハス等々，話は尽きなかった．明治初期と大正の末の差はあろうが，ライマンの浄運院の経験は，大同小異と思われてならない．

スクラップブックの采女町精養軒の領収書の名は，ライマン様の時もあれば，ダイモン様の時もある（第4図）．ダイモン様といえば，ライマンであることを界限の人々は知っていたし，ライマンをダイモンと内々呼んでいたのではなかろうか？　今の大門は，開拓使へ出かけるライマンを見ていない．震災後建った大門である（Zojoji Templeパンフレットによる）．

両側にも入口がある大きな二重門をくぐると，家の前庭になります．私の住居及び僧や武士一家の住居へ行けますが，後の方の庭の一部は，垣で分かれています．私達は正面と側面の入口の一つを用い，もう一つの入口は他家の人々が使用しています．庭は20から30ヤード程の長さで，曽て馬屋だった小さな建物があります．今は私のコック，人力車夫，その家族が住んでいます．それに新しい建物があり，私の3人の使用人——2人は家族もちです——の部屋，キチン，少し離れたところに浴室があります．これらの建物を右側にみて——コックの家は高い竹垣に一部隠れていますが——私は門から長いそして両側にゆったりした余地がある石通路を歩き，家を出たり入ったりしています．日中は開けっぱなしの戸がある大きなポーチから入ると，ガラス戸で，次が12フィー

ト平方のやや暗い部屋となります．玄関以外は役に立ちそうな部屋ではありません．その右側は同じサイズの食堂，左前方は，縦6フィート横12フィートの狭い小さな部屋で，客用寝具が置いてあります．この部屋は広くして使えます．その右は縦12フィート横20フィートの堂々とした居間で，これも障子をはずすと広くなり，採光もよくなります．その又右の奥が私の書斎で，明るくするため戸をはずし，広くするつもりです．そうすると，縦12横18フィートの部屋になります．書斎と食堂の間の寝室は，12フィート平方で，ディナーパーティーの時——（例えば12月1日火曜日に弟子達とフィールドワーク完成を祝った時の様に—1人除き，皆で12人集まりました）——寝室の家具を移しこの部屋と食堂のふすまをはずして，一つの広い部屋にします．

ライマンは日本家屋の融通自在なのに驚き重宝したようだが，ふすまや畳を知らないメリーは，どれ程理解出来ただろうか？　ライマンは，ストーブ，火鉢，敷物に言及しているが，主な部分が消えているため，彼が日本人が利用している火鉢を用いるつもりだとかいている事だけ述べておこう．

南側の庭に二つの池があって，東側に住む家と半々に分け垣がしてある．「彼等の庭はとても美しい日本庭園だ」とほめ，自分の庭も開拓使（園丁の意味であろう）の力を借り，立派な庭にしようと意気込んでいる．ベランダが二つある．一つは南側で，7時半から4時まで日がさんさんとふりそそいでいるが，もう一つは寝室と食堂側にあって狭く暗い．食堂には小さなドアがあり，ベランダを経てキチン・浴場へ屋根のある通路を歩いていける．大体これでライマンの新居の全貌がわかったので，1876年3月にライマン自身で描いた「浄運院の見取図」（第1図）と照合すると面白いが，この図面の説明もうすれて大変読み難い．

移ってから約3ケ月後，ライマンは左記の手紙を認(したた)めている．

一リヨウ（両？）同封します．金額分のホワイト・クローバの種をお送り下さい．
お願いまで．
3月12日　1875年（明治8年）
ベンジ・スミス・ライマン
ミスターM．W．スミス
ブラフ　ガーデン　横浜

ライマンの見取図を見ると，彼がよく体操をした日当りの良いベランダに面した庭に，クローバと記入しているのは，このホワイトクローバの繁殖であろう．樹木あり灌木あり，草花あり，池あり，ライマンはお隣りに引けを取らぬ庭園を完成させたと思う．

使用人達の住居も広くしました．私のコック（前は車夫でしたが，料理の腕前が良かったので，コックの地位に上げました）は，2マイル（3千メートル程）歩いて家に帰っていましたが，お上さんと娘をここに連れて来て住んだらどうかと尋ねたら，わずらわしい事から解放されるし，室代は節約出来るので早速このチャンスに飛びつきました．

その上，お上さんは私のため縫物をし，12才か13才の娘は給仕してくれることになりました．この計画は，お上さんと娘に会う前に決めましたが，幸にこの案は大成功でした．母親は取り柄のある女で，娘は利口です．どちらも思っていたように大変醜くないです．と云って美人ではないですが．私は娘のため良い学校を探します．一家の長として，本然としてその責任を感じます．彼女は少し日本語が読めますが，教養のある顔でないので．学校へ行けば良い顔になるでしょう．

教養を尊ぶライマン家の血が流れ，温かな文化人としてのライマンが浮彫りされる．慕い続けた彼の弟子たちは終生この映像を大事にしたのだ．

彼女（娘—筆者注）は，毎日日本式に髪を驚くべき複雑なやり方で結い上げ，顔にお白粉を付け，赤い口紅をさします．お母さんより背が高く大きいです．彼女はコックの実の娘ではなく，そうかと云って養女でも継子でもありません．コックは全く若いですね．夕暮れになると，遠くで使用人がべちゃべちゃしゃべったり，皆で笑ったりしているのを聞くのは，とても楽しいです．彼等は，開拓使のこみ合った男ばかりで，女っ気ない部屋にいた時よりずっと楽しいに違いありません．皆いい人ばかりです．私は大変——

その後は又はっきりしなくなる．大変の後，「幸福です」と思わず加えたい衝動に駆られた．真実の手紙とは，この程迫力のあるものなのかと思った矢先，想像力の助けで116年近くの時間の差が喪失し，ライマンと一緒に，使用人達の話し声や笑い声を聞いている錯覚に陥った．

FUKUMI Yasuko (1990) : A note on Lyman

<受付：1990年5月1日>